

---

# いつもの如く

菖蒲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつもの如く

### 【Zコード】

Z5643A

### 【作者名】

菖蒲

### 【あらすじ】

「先生、好きです、付き合ってください」「却下だ。私はまだ教師を辞める気は無いのでな」これが、僕と先生の挨拶。結構本気で言つてゐんだけど、先生はちつとも相手してくれない。先生、僕はホントに好きなんですよ？そんな感じのお話。

「先生、好きです、付き合ってください」

「却下だ。私はまだ教師を辞める気は無いのでな」

「じゃ、コーヒー貰えます?」

「ああ、ブラックで良いな?」

「ええ」

そう言つて、先生は僕にコーヒーを入れてくれる。近所の雑貨店で買つてきたという「コーヒーメーカー」が、コポコポと音を立てて黒い液体を溜め始めた。最初の方の会話は、一種の挨拶みたいなものだ。三ヶ月ほど前から、僕と先生の間だけで使われる挨拶。僕としては本気で言つてるんだけど、先生はなかなか相手にしてくれない。ちょっと不満だ。

「ホラ、入つたぞ」

「あ、どうも」

田の前に出されたマグカップを受け取ると、独特の香りが流れてきた。ズズッと、音を立てて一口。うん、美味しい。

「さて、私は仕事するが、君はどうする……って、いつもの如く、か」

「ええ、いつもの如くです」

そう言いながら、僕は鞄を開け、今日の宿題を取り出す。先生も、自分の机について、仕事を片付け始めた。そう、これが僕らのいつもの如く。先生が自分の仕事をする間、僕は宿題を終わらせる。

宿題に区切りが付いたところで、先生の顔を見上げた。整った輪郭に、均衡の取れたパーツが一部の隙も無く綺麗に並び、腰まで伸びした艶のある黒髪が良く似合っている。

「何だ? 人の顔をジロジロ見て」

「いえ、綺麗だと思いまして」

「フ、えらく率直だな」

一応なけなしの勇気を振り絞つて言つたんだけど、普通に返されてしまった。それにしても、綺麗だと言つたのを否定しないのが先生らしい。先生のそういうところが、僕は好きだ。

「さて、まだ仕事が残っているからな、話すのは後だ」「はい」

ホントはもっと話したいんだけど、仕事の邪魔はしたくないし、終つてからでも良いか。溢れ出でくる欲求を抑えつつ、僕は再び、数学の参考書と格闘を始めた。冬の陽は短い。半分沈んだ太陽が、部屋を赤く染めた。

「さてと。で、まだ諦める気にはならんのか？」

陽が完全に落ち、部屋が人工的な光で満たされた頃、先生が話し掛けてきた。仕事は終つたようだ。

「当然です。諦めるくらいなら最初から告白なんてしません」「そりやか

僕の言葉に、先生は薄く微笑つて応える。その笑顔は反則です、先生。余計に、『好き』が止められなくなります。

「何度も言うが、私は今の職が気に入ってるんだ。だから生徒と付き合つことは出来ない。わかるだろ？」

「ええ、それはわかります。でも、僕は先生が好きなんです。他の娘なんて考えられない」

「その気持ちは嬉しいんだがな、私は君とは付き合えない」

その言葉に、僕の気持ちは深く沈む。わかってる、生徒と教師が付き合えないなんてことはわかつてゐる。けど、それでも、

「僕は、やっぱり先生が好きです」

「ふう。全く、君にも困つたものだ」

そう言つ先生の様子は、大して困つてゐるよつて見えない。先生がそんな態度をとるから、僕は抜け出せなくなる。余計に、深みに嵌つていく。

「とにかくだ、私は君とは付き合えない。少なくとも今は……」「今は？ ジャあ、卒業したら良いんですか！」

「う、うん、まあ、教師と生徒という問題は無くなるな」

よつしー 先生のその言葉に、心中で大きくガツツポーズをとる。

「じゃあ、卒業したら、僕の言葉をちゃんと受け止めてください」「卒業したらって、一年半もあるぞ？ 私が誰かを好きになつたらどうする？」

「僕が先生を好きにさせます。一年半、繋ぎ止めておけるほど」「私を好きにさせる、か。まあ、男を磨く事だ。私を夢中にさせるくらいに、な」

「はい！」

「フフ、頑張ってな」

そう言つて笑つた先生は、今まで一番綺麗に見えた。

次の日、

「先生、好きです、付き合つてください」

「今は却下だ。私はまだ教師を辞める気は無いのでな」

いつもの如く僕が挨拶すると、先生はそう言つて、ニヤツと笑つた。これは、脈アリと思つて良いのかな？ 自惚れかもしれないけど、そう思つちやいますよ、先生？

(後書き)

「んにちは、菖蒲です。まずはじめに、「メンなさい」。短い上に訳  
がわからないです。

殆ど突発的に書いてしまったこの小説。先生と生徒の話が書きたか  
つただけです。

ホントに、反省します。小説はちゃんと見通しを立てて書くもの  
だと実感しました。  
これを教訓にして、次回、また頑張りたいと思します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5643a/>

---

いつもの如く

2011年10月3日08時58分発行